

北白川宮永久王 同妃両殿下の料

一般社団法人霞会館・衣紋道研究会所蔵



北白川宮永久王殿下料 浅黄關腋束帯

北白川宮永久王殿下が成年式に際して着用された浅黄關腋の束帯。明治43年(1910)2月19日に生まれた永久王は、昭和5年(1930)2月19日成年に達し、成年式を行った。前日昭和天皇(1901~1989)は、侍従甘露寺受長(1880~1977)を勅使として北白川宮邸に差遣し、冠を賜った。未成年男性皇族は、前近代における親王の位とされた「品位」を持たない無品親王の装束の色である浅黄色の關腋束帯を着して加冠の儀に臨んでいる。この時の永久王の装束は、額には空頂黒幘、赤平絹の大口袴に窠霞文浮織裏赤平絹板引表袴を穿かれ、襦袢・小袖に赤地繁菱文固地綾単、赤地小葵文固地綾板引袖、白地伏蝶丸文固地綾裏蘇芳地堅遠菱文固地綾板引続下襲、黒地小葵文固地綾板引切半臂の上に、浅黄地雲鶴文浮織關腋袍を召され、絲鞋を履き、手には泥絵の横目扇を持って、平緒で太刀を佩かれたと考えられる。加冠の儀を終えた永久王は、黒地雲鶴文固地綾縫腋袍の束帯に装束を改め、宮中に参

内し、賢所大前の儀、皇靈殿・神殿に謁するの儀に臨んだ。同日午後、葉山行幸啓中の昭和天皇・香淳皇后(1903~2000)の許に参邸し、表謁見所で成年式朝見の儀に臨まれた。

この束帯は、袍は首上の綴じ糸が「×」で、縫製は浅黄の共糸による高倉流仕立てで、石帯も高倉流で綴じられているのに対し、半臂は山科流の切半臂で、続きの下襲は白糸縫製の山科流仕立てである。また注目されるのは、袖・下襲・半臂・表袴に強装束の特徴である板引の加工が施されていることである。板引の加工を装束に施すことは、昭和天皇の大礼の際に止められており、昭和になっての成年式に際して、改めて板引の装束が新たに調進されたかについては検討を要する。浅黄關腋の束帯は、成年式のみ用いられる装束であり、父成久王が成年式の際に着用された束帯を用いられたことも考えられる。両流の仕立てが混在し、板引きの装束が用いられていることなど、板引装束が用いられていた時代に行われた故成久王の成年式や結



婚の儀、大正大礼の際に用いられた装束類を、成久王妃の房子内親王(1890~1974)や若くして父王を亡くした永久王が、その足跡を偲びつつ、宮家繁栄への加護を願って成年式に用いられたとも考えられる。

永久王妃祥子殿下料 五衣・唐衣・裳

永久王妃祥子殿下が永久王との結婚の儀に際して用いられた女房装束である。祥子妃は、尾張徳川家の分家で男爵を授けられた徳川義恕(1878~1946)の次女で、侍従長を務めた徳川義寛(1947~96)は実兄である。東京女子高等師範学校を卒業後、昭和10年(1935)4月26日永久王と結婚された。宮中賢所において結婚の儀は行われ、同日午後、宮殿鳳凰の間で朝見の儀が行われた。賢所での儀式で妃殿下がお召しになった装束は、白羽二重の半飛代・長飛代に濃小袖を重ねて赤御帯で結び、濃精好の長袴をはかれた。その上に濃地幸菱文固地綾の単、五衣は表に妃殿下の御印・紅梅に因んだ梅立浦文固地綾を用いて紅梅色の濃淡を重ね



北白川宮永久王殿下・同妃祥子殿下結婚式(昭和10年4月26日)

(紅梅重)、裏は紅の平絹としている。浅紫の打衣の上には、紅梅地松笹唐草笛形雲文二倍織の表着を重ね、唐衣は裏を萌葱地横繁菱文固地綾とし、表には徳川家の葵の紋を白地亀甲繫の上に紅梅色で配した二倍織を用いている。裳は白地三重襷文固地綾の地に、州浜に松竹梅と尾長鳥を表わしている。

